

西鶴：大句数と物種集

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1986-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1577

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西鶴——大句数と物種集——

江 本 裕

承 前

延宝四年正月に版行された西鶴の歳旦帳、『大坂歳旦』三物の第一組は、松寿軒西鶴・無徳庵鶴爪・松遣子大鶴の三人でものをされていた。そして「法牀をして元日 春のはつの坊主へんてつもなし留」の西鶴発句に対し、鶴爪が、「自由にあそはせ誹諧は花」と脇しているのである。西鶴剃髪に関しては既に森川昭氏に指摘あり（「延宝四年西鶴歳旦帳」△「文学」昭和506▽）これを若干敷衍すると、「自由にあそはせ」は、鶴爪という西鶴周辺の人物を想定せしむる号からしても、当然西鶴の身分上の変化を踏まえていると考えるべきだろう。そして森川氏も引用されたのだがここで誰しもが思い到るのは伊藤梅宇の『見聞談叢』の記事で、「名跡を手代にゆづりて僧にもならず世間を自由にくらし」の「世間を自由にくらし」とこの「自由にあそはせ」は、これも当然、同一の境遇を指すと考えるべきである。とすると鶴爪の脇は、西鶴の剃髪のみならず既に隠居し（店を手代に譲って）自由の身となつていることを示し、『見聞談叢』の記事の正しさを補強するだけでなく、その時期をも明示する貴重な資料となるのである。しかして、この「自由にあそはせ誹諧は花」には、延宝四年、三十五歳にして市隠の生活に入り俳諧に専心することを決意した西鶴への、暖い励ましの意がこめられていたのだった。少なくともこの脇の「自由」には、身分上の自由が含まれていると思うのである。

およそ以上のように考えると、この時点で三五〇に及ぶ歴大な引付を有する『大坂歳旦』を出版した西鶴の意図も、また別の意味を持つことになる。筆者は前号（「大妻国文」16号）でこの歳旦集を大阪俳壇におけるおのれの地位の誇示と記したが、あるいはそれ以上に、この三五〇に及ぶ数は、自身が以後俳諧に専心することを公にする、西鶴一流の決意表明だったのではないか。そう考えると、これは『生玉万句』も同じことなのだが、多数の無名俳人の動員も、意味ないことではなかった。我々はこの無名の大動員から、西鶴の並々ならぬ決意を読みとるべきだろう。

なお、前号の『大坂歳旦』の表(5)と(7)で訂正や補足しなければならぬ処が多くあるが、その時「手がかりなし」としたもので脱稿後気付いたものだけをとりあえず記すと、次の通りである（俳書の刊年等は表(2)の注参照）。

松井梅一（三物四組↓『糸屑』に発句1、「藤万句」に発句1）。太刀勝吉（引付48↓『昼網』に付合1）。長浜正光（引付53↓『遠近集』に発句1△大坂正光▽、『旅枕』に発句1△森田▽）。岡本益西（引付58↓『糸屑』に発句3△大坂益西▽）。斎藤宗保（引付60↓『昼網』に付合7組8句・発句1△斎藤宗保▽）。泉一祐（引付71↓『遠近集』に発句2△尼崎一祐▽）。水田元清（引付79↓水田西吟）。本照寺日信（引付121↓『大句数』第八）。三田乗船（引付209↓『糸屑』に発句8△大坂乗船▽）。長谷川久貞（引付257↓『糸屑』に発句4△撰津平野久貞▽）。庄司重一（引付261↓『遠近集』に発句7△大坂重一▽、『糸屑』に発句1△撰津尼崎重一▽）。浜田重光（引付300↓『遠近集』に発句1△大坂重光▽、『蛙井集』に付句2△重光▽）。下町盛重（引付319↓『遠近集』に発句1△大坂金重▽）。松井高明（引付331↓『牛飼』に発句2△松浦氏▽、『小町踊』に発句1△高明▽、『遠近集』に発句1△大坂高明▽）。

一 古今誹諧師手鑑

延宝四年春には和氣遠舟亭にて興行された「藤万句」に出座。この万句興行は同八年刊の遠舟撰『太夫桜』巻末に巻頭

四百韻と追加百韻の第三までと、あとは百韻の発句のみ百一句が載る。そして巻頭は「四百枚の折紙付よ藤の棚 梅翁／小鍛冶が作る春風の松 遠舟／相槌の棟あげ天下長閑にて 西鶴」だった。もっとも、第二の発句を同年四月(八日)に亡くなっている松山玖也が出し、かつ西鶴句は他の百韻発句にも追加にも見えぬので、出座に関しては問題なしとしないが、しかし該集には、西鶴の編者には見えながら他の撰集等では足跡のたどり難い者が多く入っている。西鶴と遠舟の親密さを示す資料とはなるだろう。「藤万句」に出る者のうち、上述の人名を記せば次の通りである。

心入↓生玉4・独吟一日69(下山心入)、大矢数406(心入)。

重吉↓生玉1(重吉)、独吟一日44(佐々木重吉)、落花(大坂重吉)にも。

一任↓生玉4(和田一任)、太夫桜桜三(和田一任)にも。

利方↓生玉1・点滴4(広嶋利方) 物種4・二葉1(三好利方)、天満千句(利方)にも。

一成↓生玉1(一成)。

光友↓生玉1・大坂歳旦211(玉造光友)。

一飛↓生玉2・大矢数154(一飛)、独吟一日48(松山一飛)、大坂歳旦41(松坂一飛)。

誰与↓大坂歳旦137(鶴屋誰与)、大矢数159(誰与)。

方流↓大坂歳旦52(井田方流)、大矢数381(方流)、点滴1(大坂方流)、糸屑(大坂方流)にも。

一笑↓大坂歳旦43(下町一笑)、大矢数158(一笑)、糸屑(大坂一笑)にも。

正俊↓生玉2・独吟一日93・大坂歳旦103(萩原正俊)、大矢数146(正俊)、点滴5(大坂正俊)。

戲言↓独吟一日92(小河原戲言)。太夫桜桜三(小河原戲言)にも。

可秀↓生玉1(可秀)、千宜理記(可秀)にも。

武慶↓生玉祝筈16(武慶)、独吟一日91(湊武慶)、太夫桜桜三(浜氏武慶)にも。

利玄↓生玉5(仁和寺利玄)、点滴1(大坂利玄)、落花(大坂利玄)・難波草(大坂仁和寺利玄)にも。

敬英↓独吟一日56(中村敬英)、点滴1(山城敬英)。

寸志↓生玉1・大坂歳旦194(阿部寸志)、太夫桜桜三(阿部寸志)にも。

道折↓大矢数50 1 (道折)、点滴4 (広嶋道折)、糸屑 (安芸道折) にも。

昌忠↓生玉3 (袋谷昌忠)、独吟一日52 (氏家昌忠)。

正行↓生玉2・独吟一日17・物種1 (小西正行)、屋網 (正行) にも。

久永↓大矢数24 1・48 8 (久永)、糸屑 (大坂久永) にも。

均明↓生玉1 (均明)、引導集 (亀屋均明) にも。

有年↓生玉4・物種1・二葉1 (仁和寺有年)、落花 (大坂有年) にも。

梅一↓大坂歳旦三物 (松井梅一)、糸屑 (大坂梅一) にも。

夢遊↓独吟一日16・大坂歳旦339・二葉1 (横地夢遊)、大矢数53 3 (夢遊)、点滴1 (大坂夢遊)。

一有↓独吟一日81 (家長一有)、点滴4 (今井一有)。

さて、西鶴は、十月に (陽月廿五日序)、『古今誹諧師手鑑』を上梓する。二四六枚の短冊を模刻したもので、「古筆治平、自眼を以て、其徳其名世にみてる作者集をかれしを望写、是を種として、其外、国々所々に所持いたされしを尋もとめて」、梓にちりばめたものだった。治平は本書では「平野治平」で出るが明暦三年刊の『沙金袋』に「大坂治平」で一句入るのが管見の範囲での初見、万治元年刊の『牛飼』(3句)に玄毫氏、寛文元年刊『烏帽子箱』(1句)に城越氏で入る俳優も古い人。『生玉万句』に二句出句、『大坂歳旦』(引付336)にも発句を送って西鶴との因みもあり、延宝時は「備後町八丁メ古筆見治平」(『難波雀』)として任んでいた。

本書ははじめて西鶴が大坂俳優以外にも目を向けた書であるが、選択の基準はほぼ穩やかである。伊勢荒木田守武、山崎一夜菴宗鑑、烏丸大納言光広公・黄、京道遙軒松永貞徳・長頭丸、越前本勝寺日能、京誓願寺安楽菴策伝、大坂津田休甫、京野々口松翁・立圃、京松江維舟・重頼、江戸齋藤徳元が上位十名。『守武千句』巻頭の「飛梅やかろくしくも神の春」を冒頭に置くのは西鶴編としていかにもふさわしいが、当時の勢力を勘案しながらも三都を配し、なかに貴紳・僧侶も入れて、かなりの気のつかいようである。二四六名の内訳は京都六十六名(他に伏見六名、山崎三名)、大阪五十九

表(1) 古今誹師手鑑の大阪入集者 (◎は「哥仙」「生玉」、○は「哥仙」のみ、△は「生玉」のみ入集)

順位	手鑑	大坂の 順位	上記 中	人名	備考
114	20	○		片山秋月	
112	19	○		川崎方女	
111	18	○		北多村休斎 立以	
107	17	○		広岡柳雨軒 宗信	
100	16			渋谷安明	
95	15	○		伊勢村宗善 重安	
92	14			了安寺夕翁	
86	13			井岡義之 友碩	
76	12	○		伊勢村意朔	
70	11	○		女栄春	
68	10	◎		北峯正甫	
66	9	○		半井立下 一六	
56	8			川崎宗立	
52	7	○		天満蔭山休安	
47	6			水野栄甫	
40	5	○		松山玖也	
32	4	○		夕陽庵以春 道寸	
29	3			小浜民部殿 嘉隆	
11	2	○		天満花島坊 空存	
7	1	○		津田休甫	
		◎△		人名	
186	40			武野保俊	
184	39			藤山玄端 無陸	
182	38	◎		中堀柳和軒 幾音	
125	37			高石石斎	
173	36			川崎方孝	
169	35	◎		高木川草子 松薦	
168	34			吉田立歌	
165	33	◎		前川半幽 由平	
160	32	◎		西田久任	
158	31	◎		藤田幸庵 不琢	
156	30			林定親	
153	29	○		高瀧以仙 益翁	
151	28			西村可玖	
146	27			斎藤玄真 禾刀	
142	26	○		谷宗也 忠由	
139	25	○		天満八木宗久	
131	24			川崎静寿	
125	23			宇野河内 浄治	
120	22	○		井口如貞	
118	21	△		尼坂好道	
		◎△		人名	
246	59	◎		西山宗因 西翁	
243	58	○		梶山宗音 保友	
241	57	◎		牧野一得 西鬼	
237	56	△		半拾軒 正察	
235	55			樋口如見	
229	54			女亀之	
223	53			片岡松門亭 旨恕	
221	52	◎		和氣遠舟	
216	51	○		生白庵行風	
214	50	◎		中林素玄	
209	49	△		平野治平	
206	48	◎		山口清勝	
204	47	◎		岡田悦春	
202	46			和氣由貞	
201	45			平野仲庵	
199	44	◎		井原西鶴	
194	43	◎		山城大椽 貞因	
193	42			平山方敦	
188	41			浅沼宗貞 賛也	
		◎△		人名	

西鶴

名（他に撰津八名）、江戸二十二名、堺二十一名、伊勢十二名の順。国数は三十か国（伏見・撰津等を含む）。大阪優遇の感なくもないが、「大坂西山宗因・西翁」を巻尾に置くほかは西鶴色を特に見出さない。因みに記せば、西鶴は一九九番目に「大坂井原西鶴」で「只の時もよしのは夢の桜哉」の句を載せ、右句は延宝四年の刊とされる片岡旨恕編の『草枕』に入る、西鶴・旨恕両吟歌仙の発句に合致する。表(1)は大坂俳人のみを配列順に示すもの。休甫・空存で始まり保友・西翁で終る序列は一応当て得ているが、保友の処は普通なら玖也の位置である。玖也がこの年四月に亡くなっているのと関係あるか。（玖也は大阪第五位となっている）。大阪俳壇の主要メンバー、特に古参格―休甫・空存・休安・立以等のみならず、川崎宗立（大阪8位）、了安寺夕翁（14）、川崎静寿（24）、吉田立歎（34）―は、ほぼ網羅されていると言ってよいだろう。しかして、『哥仙大坂俳諧師』入集者のなかで本書に入らぬは白江醉鷺と隅田路春の二名のみ。『生玉万句』入集者が十七名いるが、そのうち十四名は『哥仙』に入っており、『生玉』だけに限ると、平野治平（49）、半拾軒正察（56）、尼坂好道（21、ただし彼は祝賀発句）の三名だけとなる（他に堺の南方由、備中の吉岡信元あり）。

この年、前掲旨恕の『草枕』が刊せられるが、注③該書には、旨恕との両吟歌仙のほかに、旨恕・西舟・西夕・西鶴の四吟歌仙二巻も収められている。

二 西俳諧大句数

延宝五年と六年は（むろんその後も続くのであるが）、『大句数』の興行と『物種集』の編集を頂点に、西鶴の俳諧活動が一段と繁くなる年だった。いま野間光辰氏の『補西鶴年譜考證』からこの二年の実質活動のみを借覧すると、

五年四月十一日中村西国に『俳諧之口伝』一卷を伝授。

五月二十五日―生玉本覚寺にて独吟千六百句興行（『大句数』）。因みに記すと、この日宗因は、斎藤禾刀等九名と百韻興行を催して

いる（『永因七百韻』）。

冬―「烏賊の甲や我が色こぼす雪の鷲」を発句とする独吟百韻成る（翌年刊『珍重集』に入る）。

六年三月十日―青木友雪主権の『大坂桜千句』に出座（同年五月刊）。連衆は益翁・友雪・由平・均朋・本秋・益友・素敬・柴舟・如

普・西鶴で、益翁系が多い。^{注6)}

三月十三日―西国帰国に際し、由平を加え三吟三百韻（『胴骨』）。

五月十二日―岡西惟中の大阪移住を記念しての「一時軒大坂住宅初会興行」に出座、九吟百韻を成す（延宝七年刊『太郎五百韻』）。

連衆は梅翁・一時軒・益翁・由平・西鶴・如見・幾音・旨怒・貞因。

八月―片岡旨怒編『難波風』（八月序）刊。花月十百韻のうち第二の「月百韻」に同座。連衆は旨怒・貞因・西鶴・昌本。

九月―筑前の釈西海上阪して京・大阪・堺の俳人と交会したのを、西鶴が『大硯』と題し序を加え出版。西海・西鶴両吟歌仙一卷入集。

秋―京都那波律宿（江雲）亭にて江戸の田代松意を迎えて三吟三百韻を興行、翌日対馬の河野定俊と嵯峨にて両吟歌仙一卷を成す（ともに『虎溪の橋』）。

秋―惟中と両吟千句を企てるが二百韻にて終る（『太郎五百韻』）。

十一月―『俳物種集 新付合』一冊を上梓。付合五百組を収む。

十二月―大阪木村西虎主催、那波江雲を迎えての百韻興行に出座（七年刊旨怒撰『わたし船』所収）。連衆は梅翁・西虎・江雲・旨怒・西鶴・亦楽・惟中。

この年―『俳諧五徳』刊。五吟百韻三巻を収め、連衆は西翁・西鬼・次末・西鶴・西隨。三巻目のみ次末が抜け正甫が加わる。野間氏は次末を惟中の『俳諧三部抄』に「粉川氏、因州鳥取之住」とありながら『誹家大系図』に「通称堺屋治右衛門、摂州住吉ノ人、ごとく吟者」とあるのに着目され、彼を因幡・堺往來の商人、故に堺出身の正甫が代ったと推定されるのだが。次末は因幡及び京とするものが多い。^{注6)}

この年―『三鉄輪』刊。伝存せず（石川巖編『新編絵入西鶴全集』第一巻に西鶴独吟百韻一卷のみ所収）。阿誰軒『誹諧書籍目録』に「三鉄輪 一冊因序 西翁・西鶴・西夕三百韻」。

この年―『博多百合』刊か、伝存せず（『誹諧書籍目録』）。

むろん、延宝三年刊の『糸屑』（伊勢村重安撰）に発句五入集、『昼網』（同四年または五年刊、藤原貞因撰^{注6)}）に付合五

組六句入集、あるいは旨恕との両吟歌仙（『草枕』）など、五年以前に活動ないわけではない（前二者は実質活動ではないが）。しかし、上掲により五年に入りふえること、六年さらに繁くなること明らかで、七年、八年と、それはいっそう増大していくのである。そして右は、雲英末雄氏の「延宝期の重徳」（『連歌俳諧研究』48号、昭501、『元禄京都俳壇研究』の「俳諧書肆の誕生」にも言及）が明らかにされるように、延宝期に入つての大阪の俳書出版活動の活発化と全く軌を一にしていた。雲英氏は大阪で俳書を多く出した深江屋太郎兵衛の出版活動を詳述されながら延宝期三都の出版点数を表示されるが、それによると、延宝六年から九年にかけては大阪が断然他を圧し、大阪が談林俳諧を主導していたことを、如実に示すのである。^{注の}西鶴はこの潮流にのり、のちにはこの流れをリードしていくことになるのだが、西鶴自身に即すれば、やはり、延宝三年から四年にかけての剃髪・隠居が活動を促進させるに大きく与っていたと思われる。前掲列挙を一覧すればすぐ分るように、以上は量の問題だけではなかった。宗因（惟中上坂初会・木村西虎主催百韻・五徳・三鉄輪等）を師に仰ぎながら、益翁・旨恕・惟中・由平・友雪・如見等、延宝期大阪俳壇の中核となる俳人との交流が日まじに繁くなり、かつ、九州から西国や西海、四国からは定俊を迎え、江戸の松意、京の江雲と会するなど、活動の空間も拡げていくのである。俳諧師としての本格的活動はここに始まったと言つてよからう。

さて、かかる状況の中に『大句数』を置くとうどうなるか。延宝五年五月二十五日の興行。「柳にから確、桜に横槌を取ませ」と序するごとく、付合は単純ながら、見立や取合せの奇抜さは群を抜いていた。その内容に深くは立ち入らないが、例えばこの千六百句の記録を間もなく破る月松軒紀子の『辨大句数 千八百韻』と比べるだけでも、その差は歴然である。一例だけ示すと、

かまほこの煙に霞む東山

茶屋にひとりゆるす佐保姫（大句数三）

佐保姫といふ后あらそひ

御殿には霞む衣のぬれかけて（千八百韻三）

双方が『新撰犬筑波集』の巻頭「霞の衣裾はぬれけり／佐保姫の春立ちながらしとをして」を享けることいわずもなで、つまりは双方とも付合は平凡なのだが、紀子の「佐保姫」↓「霞む衣」、「后」↓「殿上」がかもす句意のいかにも常識的で平板なのに対し、西鶴の「東山」を「蒲鉾」の煙で霞ませる奇抜き、それ以上にその「霞む」から連想される「佐保姫」を麓の祇園近辺の茶屋女制限令（『京都御役所向大概覚書』）に持つていくところなどは当世をしっかりと押さえているといふべく、彼我の勝負は明らかであった。

舟より陸へあがりをうける

平家は大豆源氏は米を積かさね（大句数四）

任意に引いたのだが、西鶴には、何がとび出すか分らぬ妙な期待感が持てるのである。

「天下大矢数は星野勘左衛門其名万天にかくれなし」で始まる有名な序文は、次に「今又、俳諧の大句数、初めて我口拍子にまかせ」とまずは創始者たる巧を誇り、さらに「さし合もあり、其日数百人の連衆耳をつぶして是をきゝ給へり」と、実正なる興行たることを宣揚する。以下、この頃、日向で四百韻、南都で六百韻詠んだ者がいるというが「雪中の時鳥（あり得ざるごと）」だ。「釜の前（内証）」と「堂の前（公）」は大違いで、自分は内々なら三千六百までいったことがある。五百句できる者でも公に出ればせいぜい二百と心得よ。此度の興行の諸式や掟書が残っているので、希望の者には譲ってやってもよい。

以上が序文の大略であるが、一読、読む方が呆れるほどの、徹底した自己宣伝である。しかも後半には西鶴一流の開放的な明るさがなく、必要以上に数にこだわっている。かく声を大にせしめる事情が何かあったのか。日向・南都の速吟は現在の処未詳だが、世に守武流が喧伝され、『西山の翁の引導を以てかる口の跡絶す』（『大坂檀林桜千句』青木友雪序）、

南方由に『独吟二日千句』（伝存せず、『誹諧書籍目録』に延宝五年丁巳如月下浣）があつたとすれば、世に速吟を競う風潮の興りつつあつたことはほほ間違いない処で、どこの誰それが何百句詠んだという類の噂は西鶴の耳にも届いたであらう。軽口の俳諧に自信を持ち、何よりも『独吟一日千句』の実績を持つ西鶴の神経をそれがさかなでした。結果的に本書は矢数俳諧の嚆矢となり、仮に西鶴の才能を編纂的なそれと速吟の矢数俳諧に求めるなら、本書は後者を開花せしめる端緒となつて世を瞠目させたのだが、その序文の苛だちにも似た自己宣伝を、筆者は一応右の事情によると考えておく。

しかし、そう考えても、まだ釈然としない処が依然として残る。先述のごとく、西鶴が「数百人の連衆耳をつぶして」と豪語する本興行の五月二十五日と同じ日に、『宗韻七百韻』が、宗因もまた同志と集うて百韻を興行していたことを伝えるからである。即ち同書には、「延宝五年五月廿五日」、「秋何」の賦で、宗因の「暑氣を去ま去ま一服ま先まうす茶碗」を発句とする十吟百韻一卷が収まり、連衆は斎藤禾刀・樋口如見・尾崎尾繩・中堀幾音・井上宗恭・出来松白・光吉定祐・武野保俊・中林素玄の十名である。上は句順を示すのだが、とすれば禾刀の主催、正客が宗因ということになるだろう。しかし松白・尾繩を除けば大阪談林現役の精鋭と言つてよく、『生玉万句』以来の幾音・素玄はむろんのこと、禾刀・如見・定祐等も『独吟一日千句』に手向けの句を送り、またこの頃西鶴と同座することの多かつた顔ぶれである（前掲延宝五・六年の列挙参照）。それよりも何よりも、宗因との関係はどうなるのだろうか。

『宗因七百韻』の版行自体が書肆のさかしらであることは大方の認められる処だが（日本古典文学大辞典等）、本書の各項一政也追善を延宝四年七月八日とするなどを疑う説を筆者はまだ知らない。西鶴が『大句数』の興行に際し事前に宗因に挨拶したかどうかは別として、この興行の噂は少なくとも大阪俳人の間には伝わっていただろう。宗因は承知の上で九名の連衆と会席したのか。もし双方の期日が正しいとすれば、筆者には如上の事実が何とも奇異に感ぜられる（『大句数』の場合等に比して）。あるいはさほど神経質に考えなくてもよいのか。現在『大句数』の下巻は伝存せず、従つて追加があつたのか、あるとすれば誰が名を連ねているのかも分らずこれ以上何も言えぬが、ともかく筆者が奇異に感じたこ

とを記しておく。

付言すれば、本書は序文のあとに、「大坂松寿軒 西鶴／執筆 青木藤兵衛 友浄／同 水田庄左衛門 西吟／指合見 児玉菊砌／同 桑門 順座」と録されている。友浄は『生玉万句』の執筆者。西吟が西鶴編著に執筆者とし現れるのは本書が最初である。西吟号も本書が初見の由だが、^{注⑥}延宝四年の『大坂歳旦』引付(79)に「水田元清」で出、『昼網』に付合が六組入る「元清」も、彼と考えてよいだろう。『昼網』は野間氏が延宝四年か五年の刊、桜井武次郎氏「大坂俳壇史年表稿」は延宝四年の項に置かれるのであるが(注⑥参照)、該書の「元清」が西吟であれば、延宝四年中に成ることの微証となるか。菊砌は管見の範圍手がかかりなく、順座は『大坂歳旦』引付(19)に「桑門 順座」、「物種集」(1組)に「釈順座」で出る。なお付け加えると、本書には百韻ごと初裏第一に他者の句が入り、第一から順次記すと、竹園・順座・重政・武仙・西賀子・菊初・西長・日信・光如・円会の十名である。右のうち竹園・西賀子・円会は全く不明。重政も号多くして判別し難いが、『大矢教』(661)の「重政」、「蛙井集」(付句1)の「重政」を充て得ようか。武仙は岩井武仙。西鶴と同じく『遠近集』初見の武仙は、天和三年三月興行の『精進膾』、宝永二年八月興行の『こゝろ葉』に到るまで、殆どすべて西鶴に随っている。菊初は『定本西鶴全集』(第十卷)の頭注に「菊砌の誤か」とする。西長は『物種集』等に出る山田西長、日信は『大坂歳旦』引付(12)の「本照寺日信」。光如は『ゆめみ草』に「天満光如」(4句)があるものの速断しがたい。

三 俳諧物種集 新付合

『物種集』は「延宝六年午霜月朔日／松寿軒西鶴」の序、「延宝六年午九月吉辰／大坂南本町老丁目生野屋／六良兵衛板」の刊記を持つ^{注⑥}、横本一冊の付合集である。巻末に「大坂中俳諧月次日」を付載。版下は水田西吟。大谷篤蔵氏による

語句・作者索引が備わり（「ビブリア」28号、昭和39.8）、掲載する付合は五〇〇組、作者は一六五名（一名は作者不知）に及ぶものである。

序文は当今の俳諧隆盛を謳い、「入相の鐘にはいつとても命の内（ト付ケルノダガソレモ）句作りによりて（ハ）聞度きかたに興有、又（一方デハ）新しきとて、川原もの、又男いぢながつけ髪、松千代が柿頭巾（三）も」かづき物がある。しかして「まことにして当流の付合」は稀で、それで「此五とせあまり小耳に聞ふれたる一座の付句書集て、やうく五百組、是を見るに、まだ言の葉はつきせぬ物種也」と言う。

例によつて巻頭と巻尾を紹介すると、頭は西山梅翁・松山玖也・梶山保友・南元順・井原西鶴・和氣遠舟の順。巻尾は野々口立圃・牧野西鬼・安原貞室・梶山保友・北峯正甫、最後に読人不知が付く。お馴染のメンバーながら（立圃・貞室が異色だが）、南元順（『生玉万句』追加の脇を務める）が目立つか。入集数で言えば、梅翁の四十七組が最多。ついで西鶴三十八、玖也二十五、保友十八、元順十七。以上が上位五名でここでも元順が目を惹く。以下は大須賀胤久十四、高滝益翁と中林素玄が八組、七組入る者に衣笠一鶴・牧野西鬼・斎藤賀子があり、六組に柏一礼・岩田西里。胤久・一鶴・西里等、西鶴に近いと考えられる者の優遇が目立つ。表(2)は一六五名を入集数順に並べ通し番号を付け、名士を除いて簡単な「備考」を付したものである。

まず表示の結果を大まかに記すと、『生玉万句』出句者で入る者三十八名、『哥仙大坂俳諧師』入集者が二十一名、『独吟一日千句』三十五名、『大坂歳旦』五十二名。いずれかの一書にでも入る者が一六四名（読人不知を除く）中七十五名となり、その多寡についてはいま問わない。逆に『古今俳諧師手鑑』を除く上記四集に入らぬ者が八十九名註60あり、右のうち現在手がかりを得ない者が十二名いる。この数はやはり少なく、『物種集』が、かなり恣意の処あつても一応は名の通った者を選んで示していることを示していよう。京の立圃（163）・貞室（164）・北村湖春（139）をはじめ、伏見の任口（22）、山崎の梵益（100）、堺の正法寺正安（139）、谷永重（115）、川辺長治（80）、河内の蒲鋌（102）、和泉万女の伏屋重堅（131）、池

表(2) 物種集入集者

通し番号	入集数	人名	生玉	哥仙	独吟	日坂	大蔵	備考
21	〃	沢 西海						次郎五百韻 二葉6 花みち
20	〃	江戸 信章						草枕 到来集
19	〃	井上 宗恭						天満千句 二葉4 点滴7
18	〃	中畑 幾音	○					(略)
17	〃	吉田 川柳						二葉5 大矢56 1 点滴4
16	〃	光吉 定祐						糸屑2 昼網1 玖也追善
15	5	北峯 正南	○					(略)
14	〃	岩田 西里						二葉10 大矢目付 点滴9 花みち
13	6	柏 一礼	○					(略)
12	〃	斎藤 賀子						遠近(加之) 4 二葉14 大矢脇・10 1
11	〃	牧野 西鬼	○					(略)
10	〃	藤原 貞因	○					昼網撰
9	7	衣笠 一鶴	○					見花数寄(三吟百韻) 大矢撰紙・55 3 点滴23
8	〃	中林 素玄	○					(略)
7	8	高瀬 益翁	○					(略)
6	14	大須賀 風久	○					糸屑1 二葉6 点滴1
5	17	南 元順	○					(略)
4	18	梶山 保友						(略)
3	25	松山 玖也	○					(略)
2	38	井原 西鶴	○					(略)
1	47	西山 梅翁	○					(略)
通し番号	入集数	人名	生玉	哥仙	独吟	日坂	大蔵	備考
42	〃	尼崎 忠次						二葉1 大矢53 1
41	〃	中村 西国						俳諧之口伝 胴骨 二葉16
40	〃	谷 木因						旅衣3 二葉10 大矢15・52 3
39	3	尾崎 尾繩	○					二葉2 大夫桜
38	〃	矢野 重次						二葉1
37	〃	藤宿 江雲						虎溪の橋 二葉4
36	〃	三好 利方						天満千句(利方) 藤万句(大夫桜)
35	〃	志水 鶴随						〇 広鶴
34	〃	正木 一夢						二葉2 点滴3
33	〃	中畑 初知	○					小町踊1 遠近1 点滴4
32	〃	武野 保俊						(略)
31	〃	樋口 如見	○					俳諧歌仙画図 玖也追善 二葉4
30	〃	川野 定俊						天満千句 玖也追善 二葉5
29	〃	安平次 幸方						虎溪の橋 二葉6 大矢49 3
28	〃	前川 由平	○					二葉4 大矢41 1 花みち 置土産追善
27	〃	夕陽庵 道寸	○					(略)
26	〃	木村 西虎						(略)
25	4	和氣 遠舟	○					二葉5 大矢紅幣・9 1 花みち
24	〃	水田 西吟	○					(略)
23	〃	釈 正察	○					元清
22	5	伏見 任口						昼網6(元清) 大句数執筆 二葉13
通し番号	入集数	人名	生玉	哥仙	独吟	日坂	大蔵	備考
								懐子31 二葉1

64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	通し番号	入集数	人名	生玉	哥仙	独吟日坂	大歳	備考	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	3	〃	岩井 武仙	〇	〇	〇	〇	〃	
山田 西長	岡西 惟中	浄照坊 昨夢	片山 秋月	今村 外風	矢倉 可春	浜田 春良	早川 西随	高山 三昌	下村 南達	南部 素敬	亀屋 均朋	安知子 顯成	半井 一六	安藤 定時	江崎 亦閑	福島 益春	小谷 未弁	吉本 立川	斎藤 禾刀	川崎 正信	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
大句数七 二葉9 大矢目付	鸚鵡(女且) 伊勢踊9 二葉3 大矢脇	昼綱7 二葉5 点滴2	(略)	二葉1	二葉1	(略)	俳諧纂求 藤万句(大夫校) 二葉2	大坂独吟集 昼綱2 二葉3	二葉1	大坂種林杉千句 二葉9	大坂種林杉千句 難波千句 二葉1	手鑑 二葉2	二葉2 点滴4	二葉1 大矢13 5	大矢32 1(亦寒) 点滴6(筑前亦寒)	難波千句	二葉1 大夫校(池ノシマ未弁)	二葉1 大矢48 3 点滴1	(略)	難波千句 二葉1	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)
86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	通し番号	入集数	人名	生玉	哥仙	独吟日坂	大歳	備考	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
西田 久任	岡田 悦春	多古 夕風	今木 長尙	山本 西夕	生松 勝政	川辺 長治	中西 西流	伊丹 安英	岨山 高故	岡田 光宗	吉田 風鶴	伊丹 一友	柏木源五一	下町 百切	西村 竹鶯	伊丹 正因	深江 乘竹	俵屋 重直	田中 柳翠	川嶋 西以	浅沼 禁也	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
(略)	(略)	二葉1 点滴14	鷹塚8 手繰舟1 点滴1	草枕 二葉7 点滴12(池田)	(略)	手鑑 二葉1 大矢78 1	大矢16 3・89 3 点滴33(南都) 名残友4-5?	点滴3	新統大1 大矢54 1	点滴3	大矢樓番	二葉1 糸屑3	俳諧三部抄1 江戸通り町3	千宜理記2 昼綱3 二葉3	〃	昼綱3	二葉2	二葉6(水守) 大矢2 1	二葉1 大矢脇	大矢76 3 点滴31(南都)	手鑑 二葉2 大矢指合	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

通し番号	入集数	人名	玉	仙	吟	日	坂	旦	備考
108	1	杉本 以快							落花5
107		武村 益友							難波千句 大坂檀林桜千句 二葉2
106		天満 直補							糸屑1 二葉2 点滴17 未詳
105		喜多村丸鏡							二葉1 飛梅千句 大矢指合・413 花みち
104		平野 末成							二葉1 大矢803
103		小西 満平							ゆめみ4 手鑑 二葉1
102		兼野 灌劍							糸屑2 二葉2
101		伊勢村重支							口真似2 手鑑 二葉1
100		山崎 梵益							二葉2 大夫桜
99		小野 随心							糸屑2 昼網13組15句 二葉2
98		岩橋 豊春							二葉3 (小塩) 点滴2
97		小嶋 柳般							捨子23 二葉1
96		若狭 藤昌							二葉1 (植松) 大矢875 点滴2 (河内)
95		栗山 宗全							(略)
94		広岡 宗信							未詳
93		吉野 原雪							大矢数執筆・841 点滴15(南都) 名残友4-5
92		岡本 西任							大矢数執筆・841 点滴23(山城)
91		釈 西風							大矢14・273 引導集1
90		井原 大鶴							二葉2 点滴2
89		坂上 西春							糸屑11 二葉1
88		白江 酔鶯							昼網11 二葉3 点滴1
87	1	野沢 玉親	生	哥	独	吟	日	坂	旦
通し番号	入集数	人名	玉	仙	吟	日	坂	旦	備考
130		三好 古竹							二葉1 点滴1
129		藤井 玄三							ゆめみ3・遠近1(大坂)
128		寺田 時久							二葉1
127		木本 龍信							糸屑1 昼網2 二葉2 花みち
126		平野 一止							落花1
125		高木 宗先							難波千句 昼網1 二葉2(木倉) 大矢71
124		鍋屋 三喜							未詳
123		出来 松白							談林七百韻 宗因七百韻 花みち
122		高崎 玄礼							犬子7付13 ゆめみ8 手鑑
121		山川 西舟							草枕 二葉3 大矢453 点滴17(池田)
120		仁和寺有年							二葉1 藤方句(大夫桜)
119		西村 西流							大矢163・683 点滴33(南都) 名残友4-5?
118		渡辺 未学							昼網2組6句 点滴35
117		吉田 久栄							烏帽子2 二葉1 大矢457
116		山川 吉勝							手鑑
115		谷 永重							(略)
114		高木 松憲							未詳
113		備前 忠重							牛飼17 手鑑 点滴1
112		林 定親							大矢数141 点滴2 大夫桜
111		井手 元春							(略)
110		井口 如貞							(略)
109	1	西村 可玖	生	哥	独	吟	日	坂	旦
通し番号	入集数	人名	玉	仙	吟	日	坂	旦	備考

通し番号	人名	生	玉	仙	吟	日	坂	且	備考
148	鴻池 西六								一葉6 西鶴五百韻 大矢叩1 花みち
147	喜多川久隆								未詳
146	小西 正行								辰綱3 藤万句(大夫桜)
145	長沢 寛袋								未詳
144	矢野 夢体								未詳
143	今治 西畑								点滴1(伊予)
142	仏眼寺喜察								一葉2 点滴1(川内)
141	味田 一石								大矢603
140	池田 宗且								桜川9 二葉4 大矢叩3
139	北村 湖春								新続犬6付12
138	神田 成親								未詳
137	粉川 次末								時勢10 同上三吟百韻 業求1 二葉3
136	京 可成								季吟廿会集(寛文11・10・20百韻)
135	大阪 西信								大矢代参(上柳)
134	白石 醉白								点滴1
133	田羅尾西也								一葉1 大矢86
132	美濃 孤松								二葉3 大矢16
131	万女 重堅								砂金2 埋草3 二葉3
149	川内 宗玄								未詳
150	姫田 之治								未詳
151	梶谷 友重								落花1
152	梶井 重成								辰綱7 大矢383 点滴24 藤万句(大夫桜)
153	市村 松鶴								二葉7 大矢223・583 点滴1(勢効)
154	松井 西花								天滴千句 西鶴五百韻 大矢白幣・211
155	矢野 心計								大矢835
156	釈 順座								大句数指合・第二
157	門村 兼豊								手鑑 二葉2 点滴2
158	伊丹 一勝								糸屑2 二葉1
159	堺 成安								大子9付1 手鑑
160	舟橋 西及								未詳
161	山崎 間菜								二葉1
162	中林 不屑								難登2(江崎)
163	野々口立圃								大子77付47 烏帽子93 点滴4
164	安原 貞室								大子7 点滴2
165	読人 不知								

注 「備考」は一つの目処を示すにすぎない。前号に示したものの以外の出典を略記する。

俳諧 蒙求——岡西惟中編 延宝三年四月刊	糸 屑——伊勢村重安撰 延宝三年十一月識
大坂独吟集——延宝三年四月刊	藤 万 句——和氣遠舟編 延宝四年春興行(大夫桜所収)
千宜理記——広岡宗信撰 延宝三年九月跋	手 鑑——古今俳諧師手鑑

昼網	俳諧昼網 藤原貞因撰 延宝四年刊か	虎溪の橋——延宝六年刊
天満千句	西山宗因編 延宝四年成	西鶴五百韻——延宝七年三月刊
到来集	胡吟撰 延宝四年序	見花教寄——中村西国編 延宝七年四月刊
草枕	片岡旨恕撰 延宝四年刊	飛梅千句——西鶴編 延宝七年十月刊
俳諧之口伝	延宝五年四月一日伝授	花みち——道頓堀花みち 富永辰寿撰 延宝七年十一月序
玖也追善	延宝四年七月八日興行(宗因七百韻所収)	二葉——二葉集 杉村西治撰 延宝七年十一月序
大句数	延宝五年五月二十五日興行	次郎五百韻——岡西惟中編 延宝七年刊か
俳諧三部抄	岡西惟中撰 延宝五年十一月刊	太夫桜——和氣遠舟編 延宝八年四月刊
難波千句	高滝以仙編 延宝五年十一月刊	大矢——西鶴大矢数 延宝八年五月七日興行
宗因七百韻	延宝五年刊か	点滴集——延宝八年九月 西鶴序
大坂檀林桜千句	青木友雪編 延宝六年五月刊	置土産——西鶴置土産 元禄六年冬刊
江戸通り町	松花野二葉子撰 延宝六年七月刊	名残友——西鶴名残の友 元禄十二年夏刊

なお、乾裕幸氏『俳諧師西鶴』、桜井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』・「大坂俳壇史年表稿」(叢7号、昭和45・11)、森川昭氏『谷木因全集』、大内初夫氏『近世九州俳壇史の研究』、雲英末雄氏『元禄京都俳壇研究』、飯田正一氏「小西来山年譜稿」(一)〜(三)(園田国文) 昭和553〜573)、永野仁氏「近世初期泉州の俳人たち」(昭和四十一年度「短期大学研究報告集」)・伏屋重賢句集(大阪経大論集) 109・110合併号、昭和51・3)、上野洋三氏「岡西惟中年譜稿」(国語国文) 昭和43・11)、岸居蔵氏「西岸寺任口年譜」(仮名草子と西鶴)所収)、島居清氏「池田宗且年譜稿」(俳諧攷)所収)等を参照させていただいた。

田の宗且(140)等、また大阪においても武野保俊(32)、岨山高故(77)等、上方圏で俳歴古い者をも入れる一方で、南部素敬(54)、江戸信章(20)、美濃木因(40)、筑前の西海(21)、豊後の西国(41)、対馬の定俊(30)等、地方への目配りも怠っていない。しかしまた同時に、亀屋均朋(53)、田中柳翠(67)、俵屋重直(68)、小西満平(103)、武村益友(107)等のやがて『百人一句難波色紙』等に入る有力新人(飯田正一氏の前掲「来山年譜稿」によると来山は本書入集が

初見である)、水田西吟(24)、木村西虎(26)、西吟・西虎は『百人一句』にも入る)や山田西長(64)、山本西夕(82)、鴻池西六(148)、松井西花(154)、市村松鶴(153)等の、自身に近いと思われる新人を取り込むことも忘れていず、ここにも西鶴の編集者の才腕が遺憾なく發揮されている。

いま試みに、京と摂泉河を除く地方俳人をあげると次のようになる。

南部↓54素敬。

江戸↓20信章、73柏木源五一、122高崎玄札、123出来松白、157門村兼豊。

美濃↓40木因、132孤松。

伊勢↓153市村松鶴? (『点滴集』に「勢劬 松鶴」)。

南都↓66川嶋西以、92岡本西任、79(119)中西西流(西村西流)?。

中国筋↓113備前忠重、137粉川次末(因幡)。

四国筋↓143今治西畑。

西国筋↓121积西海(筑前)、30川野定俊(对馬)、41中村西国(豊後)、49江崎亦閑(筑前、亦閑は亦葉と同一とみる)。

以上は二十名に足らず、むしろ少ない数といえよう。もっとも、前述のごとく任口・梵益・成安・蒲鋌・重堅等を入れ、その他でも京の江雲(37)・可成(136)、山崎の間楽(161)、泉州今木の長僉(83)、伊丹から正因(70)・一友(74)・安英(78)・一勝(158)が入るなど、近郊にも西鶴の目は配られているのだから、この数を云々しても始まらない。あくまでも便宜上ののだが、それを承知の上で上掲を一覧しても、西鶴の人脈形成の一端はうかがわれるのである。例えば、信章が入るのは彼が延宝二年の秋から翌三年春までに上京している事実(野間光辰氏『年譜考證』)と深く結びついている。信章と旨恕の両吟歌仙(『草枕』)があり、旨恕と西鶴の親密度、また同年五月宗因東下のことなどを併せれば、西鶴が信章に接する機会があったことも、充分想定されるのである。京の江雲が入るのは六年秋に江戸の田代松意(『二葉集』に入る)を迎えての江雲亭での興行(『虎溪の橋』)の因みだろうし、二人は同年十二月に木村西虎主催の百韻興

行でも同座している。対馬の川野定俊とも同じく江雲亭興行の翌日、嵯峨野で歌仙一卷をまいてゐる。

豊後の中村西国には延宝五年四月に『俳諧之口伝』を伝授、六年三月には送別の興行があった(『胴骨』)。筑前の西海とも『大硯』の経緯がある。大内初夫氏の『近世九州俳壇史の研究』に即けば、西国は『胴骨』が初見、西海も『大硯』が初出とみてよいようである。大内氏の詳説されるごとく、上阪した二人(特に西国)の談林俳士との交遊は繁く、ともに西鶴系(大内氏)であれば西鶴の後援も篤かつただろうし、『物種集』に二人が分以上に多く入るのも(『二葉集』)になると西国16、西海6とさらに多くなる)、納得できるのである。

森川昭氏『谷木因全集』の「年譜」によると、木因は美濃大垣の廻船問屋。俳諧は季吟門で延宝元年刊渡辺友意撰『旅衣』の発句三入集が初見。同五年七月刊の菅野谷高政撰『後集絵合千百韻』に江戸集和との両吟百韻が入集。六年二月に宗因と一座、同年十一月序の本書に付合三組が入り、七年春頃には西鶴の大垣訪問の計画あり(実現しなかつたか)。同年十一月序の『二葉集』に付合十組入集、八年五月興行の『大矢数』では西鶴(当人)・保友(長老)・梅翁(師匠)・大鶴(縁者か)について巻頭第五を務めていた(第七には本書に入る孤松がいる)。その縁が何に始まつたかは分らぬが、二人が急接近していくありさまは一目瞭然である。そして、前述信章・西国・西海等ともに、如上が西鶴の大阪圏外にも自己の勢力をのぼそうとする姿勢のあらわれであること、これも間違いない処だろう。

南都の西以・西任(西流)はいずれも「西」が付くが、『点滴集』に「南都」で出る。西任は『西鶴名残の友』巻四の五「何ともしれぬ京の杉重」に「神主町の西流・西任」とも記される。なお西流については前掲で疑問符を付けたが、『物種』に中西西流と西村西流があり、『点滴』の「南都 西流」(33句入集)がどれに当るのかはつきりしない。上記『名残の友』に出る西流を、『定本西鶴全集』(第九卷)の頭注は、木村西流、延宝八年五月の『西鶴大矢数』の役人の中に名が見えるとし、その後の注釈書にこれに従うものもあるが、しかし『大矢数』の役人には西流の名は見えず(近世文学資料類従所収本に拠る、あるいは木邑西虎を誤るか)、第十六の三、六十八の三に「西流」を見るだけである。『大矢

「数」のこの二句が中西西流と西村西流の各一句なのか、いずれか一人の二句なのか、それとも別の西流なのか判然とせぬが、中西・西村のいずれかは『大矢数』の「西流」に該当し、それが『点滴』の「西流」に一致すると、一応考えてよいであろう。因みに記すと、『大矢数』出句者で役を務めながら句を出す者を除いても、同号のみで数えれば、四句出句者が一名、三句出句者が四名、二句になると三十九名もいる。

さて、『点滴集』は「延宝八年九月日／松寿軒／難波西鶴」の序を持つが、野間光辰氏が実質撰者と推定される（天理善本叢書『談林俳諧集』解説）、大和宇陀の岡崎秀綱（『独吟一日千句』『大矢数』に出る）の一五二句入集が断然多く（二位は西鶴の86）、かつ大和の俳人が多く入集する。西流が三十三句で十位、西以が三十一句で十三位、西任が十五句で二十五位。ついでに「西」の付く者をあげると次の通り。

西丸（南都 37）	西又（南都 14）	西二（南都 12）	西里（大阪 9）
西鬼（大阪 6）	西長（大阪 5）	西人（大阪 3）	西栄（大阪 3）
西春（大阪 2）	西通（大阪 1）	西尹（大阪 1）	西悦（大阪 1）
西似（大阪 1）	西味（大阪 1）	西風（山城 17）	西吟（桜塚 22）
西舟（池田 17）	西夕（池田 12）	西学（岩屋 4）	西畑（伊予 1）
西国（豊後 1）	西丁（筑前 1）		

以上二十五名。むろんこの中には西鬼のように、また西似のように宗因編の『天満千句』（延宝四年成）にしか出ぬ者もいるが、『二葉集』『大矢数』のどれにも名を見ぬ者は西人・西似・西味・西畑・西丁の五名のみである。そのうち「伊予 西畑」は「今治 西畑」で本『物種集』に載る。「筑前西丁」は、多分『大坂歳旦』引付（334）の林西丁だろう。しかし右の事実は、『点滴集』が実質秀綱の撰たろうと、西鶴の意向がある程度は反映されていることの証となるか。西丸は椎本才磨だが彼の関係から「西」の字のつく者が多いとも考えられない。西鶴と南都の関係を筆者は知らず、御示教を得たい。話を西以・西任に戻すと、西以は『大矢数』第七十五の三に出句、西任は同書で執筆番線をつとめ、かつ第八

十四の発句を詠んでいる。

以下枝葉末節にわたるが、江戸の出来松白・枯木源五一等、余り聞かぬ者で気付いたことを記しておく。松白は延宝三年刊の、宗因を迎えての『江戸談林十百韻』の時の九名の連衆の中の一人。その縁からか、先述『宗因七百韻』に収まる、同五年五月二十五日の「何萩百韻」に禾刀・幾音・素玄等と出座している。七年十一月序の『道頓堀花みち』にも入集、この頃上方において、その縁で『物種』に入ったか。西鶴編著には本書以外顔を出さない。その意味では南部の素敬も延宝六年三月興行の『大坂植林桜千句』に出座しており、やはりこの頃上方滞在か。彼は『二葉集』にも九組入るが、他には顔を見せない。柏木源五一は延宝六年七月刊の『江戸通り町』に「因州、源五一」で発句三入集、同五年十一月刊の惟中編『俳諧三部抄』には、「武州、江戸」で一句入集している。次末は先述の通りで（注⑤）、旨恕の『難波風』（延宝六年八月序）の第四・五・十の百韻にも出座しているから、西鶴とは面識があったと思われる。

以上『物種集』入集者の地方俳人を素描してきたが、多くの場合何かの縁があって本書に入集、西鶴の方から言えばその縁をきっかけに大阪以外に足を踏みだしていること、ほぼ了解されると思う。そしてこの姿勢は、『二葉集』になるといっそう顕著になるのだった。

四 「西」と「鶴」の号

最後に、重複する処もあるが、『物種集』入集者中、その号に「西」と「鶴」の字の付く者を取りあげてみる。本書で「西」の付く者が二十二名、「鶴」の者が五名。『大坂歳旦』の「西」四名、「鶴」六名に比べると、「西」の増大がひどく目立つ。

11 牧野西鬼 14 岩田西里 21 釈 西海 24 水田西吟 26 木村西虎 41 中村西国

西 鶴

57 早川西随	64 山田西長	66 川嶋西以	79 中西西流	82 山本西夕	89 坂上西春
91 釈 西風	92 岡本西任	119 西村西流	121 山川西舟	133 多羅尾西也	135 大坂西信
143 今治西畑	148 鴻池西六	154 松井西花	160 舟橋西及		
9 衣笠一鶴	35 志水鶴随	75 吉田風鶴	90 井原大鶴	153 市村松鶴	

表(2)の「備考」を併せ御覽いただきたいが、右の中で本書にしか名を見ず全く手がかりのないのは舟橋西及一名のみである。また、市村松鶴を『点滴集』は「勢劬 松鶴」とするがこれも他に例を見ず、『点滴』の編集上の杜撰さ(野間光辰氏天理善本叢書解説)からみて、留保せざるを得ない。

さて、西鬼・西随は既述のごとく宗因門と考えてよく、松井西花も管見の範圍宗因の『天満千句』(延宝四年成)に名を見るのが最初で、当初は宗因門かと思われるのだが、前述西似とは対照的である。即ち延宝七年三月には鴻池西六亭にて興行された『西鶴五百韻』に出座(連衆は西鶴・西六・西友・西吟)、この年『二葉集』に六組入集(『道頓堀花みち』にも入る)、翌八年四月の刊、和氣遠舟撰の『太夫桜』では、西鶴を巻頭に置く桜四(花情七十九句)に、西戎・西虎・西六・西吟等とともに入集、五月の『大矢数』興行では、白幣役を務めている。最初宗因門だったとしても、間もなく西鶴に随いた人物と考えてよいのではないか。

『大坂歳旦』より名を見るのが水田西吟(元清)・今治西畑・衣笠一鶴・井原大鶴。西畑を除けば、他はこの時点西鶴門と考えてよい。多羅尾西也は他では『二葉集』に一組入るのみだが、『生玉万句』に出る蘆谷西也との関係は未詳である。ついでに記すと、岩田西里と衣笠一鶴は、西鶴編著その他の入集状況から、『生玉』の岩田峯雪・衣(絹)笠常頼と同一人の可能性あるのだが、その証をまだ見出さない。山本西夕と山川西舟は延宝四年刊の『草枕』で西鶴と同座するの管見の範圍の初見、山田西長は翌年の『大句数』第七に出るのが最初である。西長は木村西虎とともに天和三年三月の宗因追善『精進膾』に出座。以後の活動を勘案すると、西夕・西舟・西長とも、西鶴直門と考えてよいだろう。他は西国・

西海を除くと、西鶴編著に限れば本書が初出。付言すると、この中から『百人一句難波色紙』に入るのが水田西吟と木村西虎の二名（西鬼・西随も）『山海集』『三ヶ津』に入る者はなく、『高名集』に西国が入るのみである。

ここで観点を変え、『大矢数』興行で役人を務めた者をあげてみる。岩田西里（目付木）、水田西吟（執筆）、木村西虎（紅幣）、山田西長（目付木）、岡本西任（執筆番繰）、大坂（上柳）西信（代参）、松井西花（白幣）、衣笠一鶴（懐紙番繰）、吉田風鶴（同上）の九名。『大矢数』最尾の第一〇七の発句を詠む鴻池西六と巻頭第四の井原大鶴も、あるいはこれに準じてよいか。大鶴は既述の通りで、西六は摂津豊能郡山本（『西鶴五百韻』では山本西六）に住した酒造家鴻池の一族（野間氏注(1)の項）、とすると最後を飾るにふさわしい人物となる。それはともかく、役を務めた者の役柄は決して晴れがましいものではなかった。がしかし、直門とすればいかにもふさわしい役割ではないか。役を務めずとも出句しているのが、西海（373）、西以（763）、西国（204）、西舟（453）、松鶴（223・583）の五名。いずれも第三を付けている。

如上を考えると、すべてとは言わぬがここに出る者の殆どが、西鶴直門と考えられるのである。延宝六年の時点で西鶴は、門弟と呼べる弟子を、かなりの数有していたと言っただろう。これが七年、八年とどうなっていくか。『二葉集』と『大矢数』がまたみごとにそれを示してくれるのである。

注(1) 「藤万句」の「誰与」は「鶏与」（東大竹冷文庫マイクロフィッシュによる）とも読めるが、「誰与」としておく。

注(2) 『引導集』は中村俊定先生『俳諧史の諸問題』の翻刻による。「亀屋」は「均朋」がいるが、原本未確。

注(3) 野間光辰氏『補西鶴年譜考証』。

注(4) 桜井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』（第二章）の益翁系の条参照。

注(5) 管見の範囲で記すと、寛文十二年刊松江重頼撰『時勢粧』の「四季発句句引」（巻二末）に「京之住／粉川氏次末」（10句入集）。巻四にも寛文十一年卯月上旬の維舟・次末・直重三吟百韻一卷を収む。延宝三年刊惟中編『俳諧蒙求』（下）も「京次末」。『物種集』

は「粉川次末」、「二葉集」は「因州次末」で三組と二組。「寛文比俳諧宗匠并素人名誉人」には「粉川氏因州鳥取屋六兵衛／維舟門人／次末」とある。

注(6) 野間氏『年譜考證』は延宝四、五年の刊、藤原貞因撰。桜井武次郎氏「大坂俳壇史年表稿」(叢)7号、昭和45(11)は同四年の項に置く。

注(7) 京・大阪・江戸の出版点数は、延宝3年で8・8・2。四年7・8・3。五年10・5・2であるが。六年になると9・17・9、七年8・14・7、八年9・18・10、九年7・10・4となり、大阪が他を圧している(雲英氏稿より)。

注(8) 杉浦正一郎氏「西吟の研究」(国語と国文学)昭和23(5)。なお『日本古典文学大辞典』(乾裕幸氏執筆)は延宝五年初見と若干幅を持たせる。

注(9) 序文と刊記の齟齬(十一月と九月)については、版下の清書が終ったのが九月、本文全部の板刻成つて序を加えたのが十一月と考えられている(野間光辰氏『年譜考證』)。

注(10) 『古今俳諧師年鑑』は先述のごとく西鶴に即すれば余り特徴がなく、ここでは除いた。

注(11) 松井西花について野間光辰氏は『西鶴年譜考證』の「刪補」編で(延宝七年三月の条)天理図書館蔵の『滑稽堂西花上落日記』(元禄四年成)を紹介して肥前の人とされるが、大内初夫氏『近世九州俳壇史の研究』(一一二頁)は、これを全くの別人とされる。